

令和2年度 東国文化自由研究レポート



研究テーマ

出土品でみる古代群馬と

大陸諸国との関係

提出日 令和2年8月24日



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 1組 14番

氏名 佐藤 絢菜

## 1. 調査の動機

東日本最大の古墳大国群馬では、多くの古墳から当時の東アジア（中国・朝鮮半島）との交流をうかがわせる様々な出土品が出ている。それらには、どのようなものがあり、どのように群馬へ入ってきたのか、また、文物だけでなく、大陸諸国の技術はどうやって伝わってきたのか、現在のような交通手段がない時代に、諸外国との交流がどのように行われてきたのか深く興味を持ったから。

## 2. 調査の方法

### ①参考資料や文献の活用

- ・東国文化副読本（群馬県発行）
- ・綿貫観音山古墳ガイドブック（県立歴史博物館発行）
- ・パンフレット「渡来人がつくった土器」（高崎市観音塚考古資料館発行）
- ・インターネット  
群馬県 HP

### ②実際の出土品を目で見て確かめる

- ・高崎市観音塚考古資料館
- ・群馬県立歴史博物館  
企画展「綿貫観音山古墳のすべて」

## 3. 調査の結果

### 【大陸諸国と関わりがあるとされる出土品の数々】

まず、大陸諸国とかかわりのある出土品について調べてみた。3～4世紀を代表する交流品としては「鏡」があげられる。これは、邪馬台国の女王卑弥呼が中国から賜ったと推定される「三角縁神獣鏡」と関係を持つ型の鏡が、前橋天神山古墳（前橋市）や柴咲蟹沢古墳（高崎市）から出土している。5世紀になると優れた金、銀、金銅製の工芸品や装飾品、鉄製の甲冑などの武具、馬具、須恵器などが日本にもたらされた。また、それらを作る高度な技術もこの頃に入ってきたと思われる。高崎市の剣崎長瀬遺跡から出土した「金製垂飾付耳飾り」は、朝鮮半島南部（伽耶地域）に良くみられる形で、渡来人によって直接この地に持ち込まれた可能性が高いそうだ。5世紀後半には、日本国内で金銅製の馬具が多く作られるようになる。綿貫観音山古墳（高崎市）や山王金冠塚古墳（前橋市）など、6世紀後半以降に造られた古墳からは、金銅製品や金銀で飾られた馬具など、多数の副葬品が出土している。

### ◆綿貫観音山古墳の出土品◆

綿貫観音山古墳からは、中国や朝鮮半島に縁のある、様々な副葬品が出土している。これらの品々を副葬していた観音山古墳の被葬者が、ヤマト王権と深くかかわり、当時の諸外国との外交政策にも何らから形で携わっていたことが、この副葬品からうかがい知ることができる。

#### 銅水瓶



水瓶の起源は古代インドあり、仏教の伝播とともに中国に伝わった。観音山古墳の銅水瓶は、562年に没した中国・北齊の貴族の墓から形の良く似たものが出土したことから、日本に同じような水瓶がほとんど無いことから中国大陸で作られたものが日本に渡ってきたと考えられる。

獣帯鏡とは、主文様に四神などの霊獣や神仙像が描かれている鏡。観音山古墳の獣帯鏡は、中国鏡を粘土に写し取った鋳型を基に製作された「踏み返し鏡」で、韓国の武寧王陵出土鏡と伝滋賀県三上山下古墳出土の2面と同型鏡だ。

#### 獣帯鏡



#### 金銅心葉形杏葉

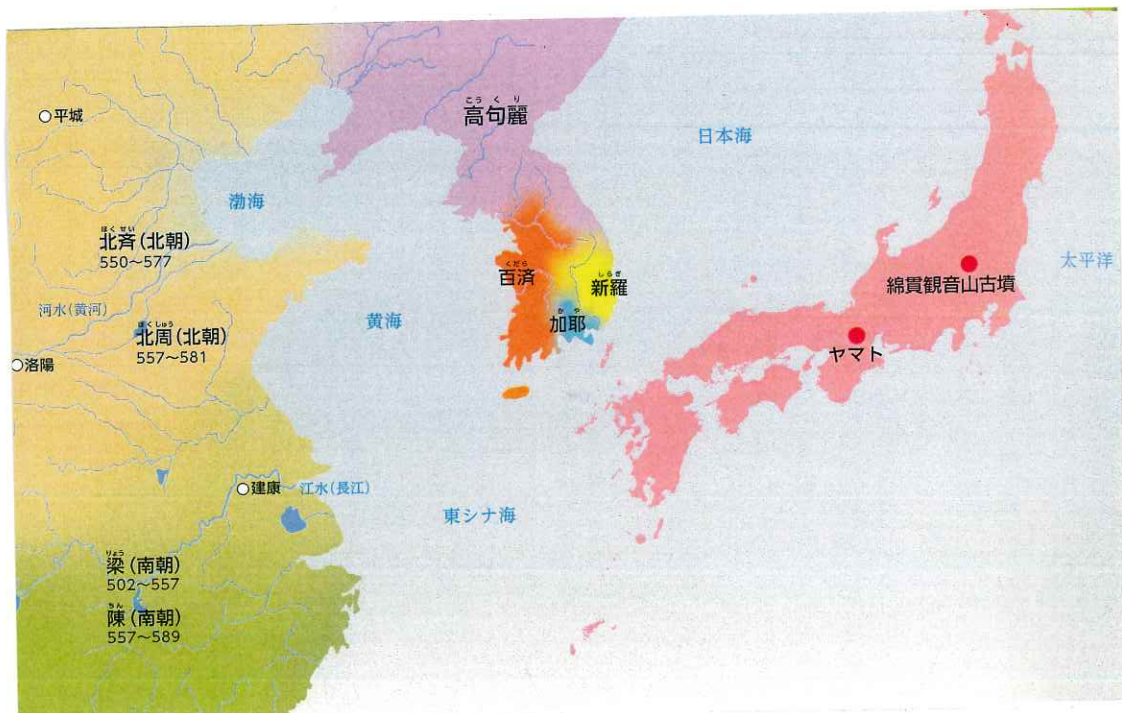


忍冬文 (= 仏教系文様的一种。忍冬とはスイカズラ科の植物) の透かし彫りが施されたハート型の馬具。起源は朝鮮半島の新羅地域。

花卉形の垂飾りを持つ馬具。朝鮮半島の高句麗地域や新羅地域で4世紀後半から5世紀代に類似例があり、慶州市では新羅の王陵から多数出土している。

#### 金銅歩揺付雲珠・辻金具・飾金具





6世紀後半のアジア

綿貫観音山古墳が造られた時代は、中国大陸では南朝と北朝の対立が続き、朝鮮半島では高句麗・百濟・新羅・加耶の諸国が争いを繰り返していた激動の時代だった。

### 調査結果 1

県立歴史博物館で企画展「綿貫観音山古墳のすべて」が開催されており、実際に古墳から出土した品々を見ることができた。綿貫観音山古墳の副葬品には、中国や朝鮮半島との関わりを示すものが多数あり、古代群馬と大陸諸国の交流をはっきりと実感することができた。特に、銅水瓶は、当時日本の中心であったヤマト王権周辺でもあまり見られないような先進的なものらしく、当時の群馬がヤマト王権を介さず大陸諸国と独自のルートを持って交流していたのかも？と考えるきっかけを与えてくれた。

また、観音山古墳以外から出土した副葬品も興味をそそられるものが多く、実際に現地や現地の資料館などを訪れて、実際に目にしてみたいと思った。

### 【古代群馬の渡来人の役割について】

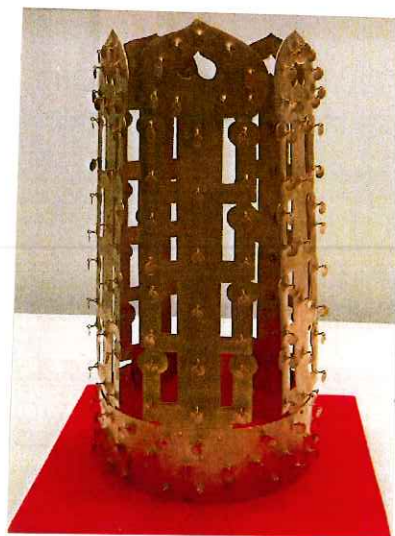
渡来人が古代群馬において、どんな役割を担っていたか調べてみた。

古墳時代、強大な力を持っていたヤマト王権が、東日本一帯を治めるための拠点として、群馬を重視していたことにより、主に朝鮮半島からの渡来人が、馬の生産や飼育技術、金属加工などの技術、須恵器を作る技術などを伝えたとされている。

◆その他、気になる出土品◆

- ・**金製の耳飾り**（剣崎長瀬西遺跡：高崎市）  
朝鮮半島南部（伽耶地域）を中心にみられる形で、渡来人が身に着けてきたものと考えられている。
- ・**金銅製冠**（山王金冠塚古墳：前橋市）  
金銅製の冠は朝鮮半島の影響が強く、韓国の慶州の古墳で出土した冠と良く似ている。
- ・**「唐三彩」の陶枕**（多田山古墳群・12号墳：伊勢崎市）  
古代中国の王侯貴族の愛用品が持ち込まれたものといわれる。
- ・**金銅製の飾履**（下芝谷ツ古墳：高崎市）  
朝鮮半島で王の埋葬の時に使う飾りのついたクツと同様なもので国内では15例しか出土していない。
- ・**鉄製の鋏**（大道南3号墳：高崎市）  
鋏の出土は国内でも非常に数が限られていて、明らかに朝鮮半島からの舶載品と考えられている。新羅の王陵や百済の夢村土城などで類似したものが出土している。

金の耳飾り



金銅製冠

鉄製の鋏



また、水路を造って地域の水田開発に関わっていたことも分かっている。更に、渡来人の技術は食生活の上でも大きく役だっていたことが分かっている。6世紀以降、家の隅の方に「かまど」が作られるようになった。かまどは、朝鮮半島との交流によって日本に伝えられ、広く使われるようになったと考えられている。

近年の発掘調査の成果では、古墳時代中期後半（5世紀後半）になると榛名山南麓から高崎市を中心とする西毛地域に渡来系文物を出土する遺跡が多くみられるようになり、その頃から群馬県に渡来人が存在したと推測されるようになったそうだ。剣崎長瀬西遺跡（高崎市）では、墓・土器・金工品・馬具・馬の埋葬などに多くの渡来系要素が確認されている。また、渡来人の先進技術により、窯業や馬の生産・飼育、石材や木材の産出などが盛んにおこなわれていたと思われる集落も確認されている。

## 調査結果2

渡来人の最先端の技術により、群馬の文化がより一層栄え、発展していったことがこれらの調査から分かった。渡来人が群馬のみならず、日本全体に残した功績は計り知れないことだろう。大陸からもたらされた「馬」によって、行動範囲が広がり、国内諸国との交流も安易になったはずだ（歩きに比べてだが）。渡来人の技術は、人々の生活を豊かにし、その後へと続く技術大国日本の礎の一つであったことは間違えないと思えた。

### 【各地に残る渡来人の足跡】

上記の他にも渡来人との関わりが感じられる遺跡が各地に残っているので調べてみた。

#### ・上野三碑

高崎市山名町にある「山上碑」、「金沢碑」と高崎市吉井町池にある「多胡碑」の3つの石碑をあわせて「上野三碑」という。2017年10月にユネスコ「世界の記憶」に登録されている。日本で文字の使用が始まったのは、2000年前頃の中国との外交からとされているが、4世紀以降、ヤマト王権は朝鮮半島からの渡来人を組織化し、外交や内政にも文字を使用するようになった。この三碑は、ヤマト王権の支配体制や当時の家族構成、仏教の教えや文字の広がりなど、当時の文化や暮らしを知る上でも貴重な資料であり、同時に渡来人から伝わった文化や技術が人々の生活に大きく関わっていたことを知れる資料でもある。

#### ・「甲を着た古墳人」

2012年11月に金井遺跡群から発掘された「甲を着た古墳人」は、当時の姿そのままの

状態で発見された。これは、榛名山の噴火によって火山灰と火砕流が真空パックのような役割を果たしたと考えられている。この甲を着た古墳人の甲冑を復元したところ、当時の最先端技術の甲冑を身に着けていたことが分かり、また、渡来人によってもたらされた「馬」と深い関わりがあることも分かった。さらに、頭部の骨を復元した所、甲を着た古墳人の顔が明らかになり、目鼻立ちや顔の形が朝鮮半島の人と良く似ていることが分かった。

### ・韓式系土器

韓式系土器の一番の特徴は、表面に「タタキ」と呼ばれる文様があることで、これは土器を作る時に表面を板で叩いた跡。タタキの文様には「格子タタキ」・「平行タタキ」・「縄蓆タタキ」などがあり、その文様の違いは渡来人がどの地域の出身であるかを反映しているそう。



03 平行タタキ



02 格子タタキ



04 縄蓆文タタキ

### 調査結果 3

多湖碑については上毛カルタで名前だけは知っているという程度だったが、三碑とも、1300年も昔に立てられたというのに、今でも使われている漢字で書かれていることに驚いた。中国のみならず、日本の書家の人たちも注目しているというが、私も書道をやっているので、中国独特の楷書体で書かれた碑文に興味を沸き、実物を見に行きたくなった。

また、「甲を着た古墳人」も母が渋川市出身なので、母と一緒に埋蔵文化財調査センターに見学に行きたいと思う。

### 感想

今回の調査では、4世紀から6世紀にかけて、中国・朝鮮半島を由来とする多くの製品が東

国に持ち込まれ、また、それを作る技術を持った渡来人の多くが群馬の地で生活をしてきたことまでは分かったが、知りたいことの一つであった「実際に群馬にどうやって大陸諸国の文化が入ってきたのか」までは、調べることが出来なかった。参考文献や資料においても、この時代の陸路、水路においての渡来人の軌跡をはっきりと示されたものを見つけることができなかったため、今後の調査の発展に期待したい。

#### 《参考文献・資料》

- ①『綿貫観音山古墳 ガイドブック』 群馬県立歴史博物館 2020年3月発行  
群馬県立歴史博物館「綿貫観音山古墳」パンフレット
- ②『東国文化副読本』 松島榮治監修 群馬県 2020年4月発行
- ③令和2年高崎市観音塚考古資料館 ミニ企画展「渡来人がつくった土器」パンフレット  
平成30年高崎市観音塚考古資料館 ミニ企画展「昔を語る多胡の古墳」パンフレット
- ④群馬県 東国文化ポータルサイト「ぐんま東国文化ものがたり」  
徳江 秀夫（群馬県立歴史博物館）《副葬品》豪華な副葬品から何がわかるのか？  
<https://www.pref.gunma.jp/contents/100103584.pdf>